

「道徳性の内在化」について

卒業論文では、「道徳性の内在化」をテーマとし、乳幼児は「道徳性」と持っているか、乳幼児がどう善悪を判断しているかなどを文献から調べた。さらに、道徳教科を教えている高校教員に、「道徳性」に対し、どのような認識を持っているのか、どういうことに留意して生徒に道徳を教えているのかということ調査した。調査方法は、アンケートとインタビューで行った。

コロナウィルス感染の影響で、対面でインタビュー調査を実施できた教員は一人だけだったが、他の教員はアンケート調査によって協力を得ることができた。アンケート内容は、「道徳」と聞いて、どんなことを思い浮かべるか、自分が子どもの頃、「道徳」というものをどのように学んだか、どのように考えていたか、幼少期どのように善悪を判断していたか、今現在はどうか善悪の判断をしているか、幼児が善悪の判断に気づく機会が必要だと思うか、その理由、子どもに「道徳性」を教える、伝えるときにどのように伝えるか、道徳教育について思っていること、感じていること、の計六問に答えてもらった。回答は一人ひとり違い、

「道徳」というものがいかに可視化できないものか、というものが知ることができた。インタビューは、私立高校教員1名(A教員)に半構造化インタビュー方式で行い、「道徳」と聞いて何を思い浮かべるか、自身が子どもの頃、所謂「道徳」というものをどのようにして学んだか、善悪を判断する時には、どのように判断しているか、生徒に「道徳」について話すとき、何を感じてほしいかの4つの質問に答えてもらった。インタビューでは、A教員から教員として考える道徳や、今の道徳教育の課題、今後どのように道徳というものを子どもに伝えていくのが良いか、ということについて語られた。その他には、「アンパンマン」を道徳的観点から見たら、という話があり、アンパンマンという物語を、「アンパンマン」「バイキンマン」「かばおくん」の三人に絞って、それぞれの視点から物語を見ると、アンパンマンもバイキンマンもかばおくんもみんな善くてみんな悪いという語りからA教員からみられた。すなわち、アンパンマンは人の話を聞かない人、バイキンマンは人を攻撃してしまう人、かばおくんは相手のことを考えられない人、と考えると、全員が悪のようにも感じるが、視点を変えるとみんな善になるという内容であった。これらの調べたものや、アンケート、インタビューをもとに、「道徳」とはどのようなものなのか、また、これからの「道徳」の在り方について考察した。

その結果、乳幼児から、「道徳性」を持っているということ、そしてその性質は、人間が生きていく環境によって、いろんな形に形成されていくということが分かった。また、それを一つの普遍的な考え方にまとめることは難しいこと、ということが分かった。さらに、道徳教育を行う教育現場では子ども達に均等な教育をすることが難しいということも分かった。今後の課題として、子ども達が実感を持って学んでいけるような教育環境について、具体的な実践例を収集して、現場に立ったときに実践に役立てたいと考えている。